

季節の作業

十一月



この月はりんご等貯蔵果
実の取扱いと、収穫後の園
の手入れが問題になる。

果実貯蔵上の 注意事項

全国的に果樹の増植が唱
えられ、北海道でも果樹の一万畝(一万町
歩)増植計画が取上げられている。しかし
これは、増植さえすれば利潤がもたらされ
る、といったような簡単なものでは決して
ない。実績を期待するためには計画生産、
計画販売の裏付が必ずなくてはならない。

このように考えると、どうしても貯蔵技
術あるいは方法の検討が大切になつてく
る。特に本道の如き寒冷地では、生産され
る果実がよく貯蔵に耐え得る特性を持つて
いるのであるから、出来るだけ理想的な方
法で貯蔵し、品質良好なものを計画的に出
荷する方法を充分検討して見なければなら
ない。

1 貯蔵庫の吟味

貯蔵庫は果実を入れる前に点検して、換
気孔、扉の破損等は予め修理しておかねば
ならない。さらに貯蔵庫内には「カビ」や
腐敗菌が多く、特に前年の腐敗果屑等が残
つていた場合は充分清掃して、入庫一定期

間前に必ず消毒を励行することが大切であ
る。

この際、壁、天井、床等はもちろんのこ
と、果実を入れて中に入れる箱等、庫内で
使う器具類はすべて消毒しなければ効果が
少ない。

消毒薬としてはホルマリン(1%液)、硫
黄華(一立方米に硫黄華四〇gr、硝石三gr
を混ぜたものを用いる)による燻蒸等が一
般的に用いられている。これ等は薬剤で処
理した後、一―二昼夜貯蔵庫を密閉してお
くことが必要で、その後開放して充分空気
を入れ換え、刺戟臭がまつたく消失してか
らでなければ、果実を搬入してはならない。

2 貯蔵する果実の吟味

せつかく経費をかけて貯蔵しても果実自
体の条件が悪く、直ぐに「ボケ」て了つた
り、貯蔵中に生理障害が多発するようでは
意味がない。したがって貯蔵に廻す果実は
特に採取、選果を念入りに吟味しなければ
ならない。

果実の貯蔵力は未熟であつても、また完
熟に失しても思わしくない。未熟果は第一
に品質が劣り、貯蔵中に変質しやすい。例
えばりんご果実の貯蔵中の「ヤケ」紅玉等
では「斑点病」等の発生が多くなる。

完全に過ぎると貯蔵中にボケやすく、紅

玉のゴム病等が多発するおそれがある。特
にりんご紅玉、ゴールデンデリシャスの貯
蔵果の熟度には注意を要する。将来は貯蔵
りんごの入庫前に、硬度計で熟度を測定し、
好適なものだけを入庫する。くらしいの注意が
必要であると思う。

最近一般大衆向のりんご(りんごに限つ
たことではないが)は、従来に比し小形の
ものが奨励されている。家庭用としてはま
ことに同感であつて、小粒でしかもよく充
実したものが望ましい。ところが小形のも
の一面貯蔵にもよく耐えるのである。大
形のものはどうしても生理障害の発生が多
くボケやすい。したがって貯蔵前によく厳
選して、小形がよく揃つたものだけを長期
の貯蔵に向けるべきである。

これ等貯蔵果の条件から見ると、気候の
冷涼な地帯、例えば北海道のりんご等は貯
蔵に打つてつつけの条件を備えていること
に。何とか一日も早く本道として特色の
ある品種を大いに増植し、協同力による貯
蔵、出荷、販売の体制を整えて、本道りん
ごあるいはぶどう等の真価を、国内はもち
ろん国外にまでも知らしめたいものであ
る。

3 貯蔵条件

このうちもつとも大切なことは貯蔵中の
温度と湿度である。中でも温度はもつとも
重要で、果実の貯蔵のためには0℃附近が
もつともよく、出来るだけ温度の振らない
ことが望ましい。したがって理想的には採
集したならば直ちに0℃近い温度の冷温庫
に入庫出来れば申分がない。しかし現在のの

普通の貯蔵庫では一〇月下旬になつても未
だ相当庫内温度が高い。夫で止むを得ず、
日陰に野積して庫内温度の下るまで待たね
ばならぬ訳である。

しかし野積中も日中は結構気温が高いか
ら、一度でも温度が上らぬように工夫しな
ければならない。特に高温でボケやすいデ
リシャス系統では二二℃で一週間置かれる
と、六カ月貯蔵したものと同程度に軟化す
るといわれている。他のなし、ぶどう等の
果実においても採集後出来るだけ早く温度
を下げるのが望ましい。但し洋梨だけは
採集後すぐに冷蔵すると、後熟が進まなく
なることがあるから注意を要する。

湿度も果実の貯蔵力とくに目減と、カビ
等による腐敗果の発生と密接な関係を持つ
ている。すなわち多湿に過ぎるとカビの発
生が多くなり、乾き過ぎると萎びやすくな
る。適湿度は八五―九〇%が適当とされて
いる。

その他の貯蔵上の注意は紙数の関係で米
月に譲る。来月に入ると北海道は積雪を見
る地帯が多くなるので十一月中に果樹園の
後片付を急がねばならぬ。

1 苗木の仮植え

来春植付ける苗木を
購入したような場合は、丁寧に仮生けして
一本一本の根に直接土が触れるように心が
けること。土は多目にかけて凍害を防ぎ、
地上部は(特に北部)はコモ等で巻いて置
くこと。

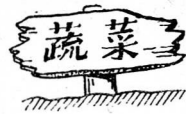
2 園内の清掃

農業や防除器具は目覚
ましい発達を遂げたが、これのみに頼らず
病害虫の防除は園の掃除、菌や害虫媒介物

の除去を励行すること等によつて一段と効果の上るものである。したがつて棚下し前に剪定したぶどうの枝で「黒痘病菌」等のついたようなもの、りんご等の落葉にはこの中に潜在する「キンモンホソガ」褐斑病菌等があるから、このようなものはかき集めて焼くか、畑の中に六〇―七〇℃で焼く以上の深さの穴を掘つて埋め込むがよい。有機物補給の意味から手間は多少掛つても勘込むことが望ましい。ぶどうでは地際の皮膚がおかされる「根くび焼け」がある。これは冬期に進行する場合が多いので、おそれのある所では積雪前に地際に盛土して予防するがよい。

(北大T・T)

初冬前の作業



雪がちらつき始め、日も短い昨今、越冬準備に忙しい毎日を送つて居られることと思われませんが、圃場の

跡片付けは全く終つたかどうか、更に秋耕しも、少くとも明年の作付を考えた上での堆肥の配分もして置かねばならない。堆肥が少なくしかも家畜のいない場合はその対策も早めに考へて置くことが必要である。

寒さが厳しくなつて、薄氷も厚さを増して来ると、越冬野菜の圃場を見廻り、根の浮きあがりのひどい場合には藁とか、籾殻を根元に置いてやる等の作業も忘れてはならない。根雪前に雪腐れを防ぐため菜類等ではセレン石灰の撒布も有効である。

根雪の早い場合には心配ないが、貯蔵野菜の手入れ、土寄せも寒さのきびしくなる前

には是非行い度い。

床土の積込みのおくれた場合、積込んだ堆肥の腐熟を促進させる為と、不足養分の添加の為の切返しは、土の湿りの少ない晴天続きの時期を避んで行ふ必要がある。例年苗木で病害虫の発生に困る場合は、春先の消毒が使用時期から考へてみても却々面倒であるから、秋のうちに消毒して置くのが安全である。方法としては一立坪に石灰窒素二―三疋か、消石灰四―五疋を切返しの際に撒布して混合して置くか、クローリックリンを一、二五瓦(二・五ポンド)を注入する。クローリックリンは寒いと効果は大分減殺される。

作況の概要

今年度の蔬菜栽培の跡を振り返つて見ると、トンネル早熟栽培が急速にふえ、葉菜から果菜迄、ビニールトンネルが常識となり、経営上是非でも取り入れねばならず、集約化による技術の向上は著しいものが見られた。特に今春の天候不順は病害虫の発生が多く、しかも被覆期間が長期にわたつたため、管理上多くの問題があつた。熟期も例年よりおくれ、価格も馬鹿高値は見られなくなつた。心配された天候は七月に入つて好転し、近年に見られない高温の夏を迎えたわけで、八月中旬の乾燥を除いては割合順調なしめりもあり、秋野菜の発芽も一部大根等で播種のおくれた所は極めて順調にスタートしたようである。

七月の温度の急変で、瓜類等に生理的な障碍と思われるバイラス状の縮みが見られ

心配されたが、その後生育の進むに従つて間もなく正常にもどり、キウリ、スイカを始め着果も極めて良く、木も割合長もちした。七月中旬からアオムシ、ヨトウムシの発生が多く、野菜に限らずその防除に大分苦勞した。又高温のためにカンランの中晩生系では、地力の充分な畑を除いて結球を急ぎ、斑点病、ベト病も多く見られた。ハクサイ、ダイコンには例年に見られない程軟腐病が発生し、早播のもの程ひどい被害をうけ、九月下旬から白斑病、ヨトウの発生もひどかつた。

トマトの疫病の発生は例年よりかなりおそかつたが、露地栽培では成熟期もそれだけおくれただけに、病気に強い品種に対する歓心と、薬剤散布の技術と云うか、単に回数に頼る撒布だけではなく、適期に於ける集中的撒布と云ふことの必要を痛感させられた。

価格面からながめて見ると、高温乾燥と云ふ気候の推移は全国的なもので、そのためものによつては極端な高値から安値のものとの差が大きかつた。いまだかつて見られた事のないニンシンの高値によるニンジンブームの様なものから、春先安かつたホーレン草、ネギの秋口の高値等は天候のせいであり、又反面果菜等は割合低調の様であつた。

要するに今年の結果から考へさせられる事は病害虫の多発による明年への影響と、恐らく今後も繰返すだろうと思われる価格の変動に対する対策を如何にするかということである。その為には安全の分散の意味

で単一種類に重点を置かず数種を組合せ、限りある肥沃な野菜畑を有効に使うための集約化による二―三毛作と、病害虫、労力の面からの輪栽を考へた作付方法、即ち作付体系の確立が大切でないかと考へられる。之に就いては稿を新たに考へて見たいと思う。

沢庵の漬け方

戦後生活用式、食生活の変化と、年中多種類の野菜が市場に出廻る様になつた事などから、特に都市生活者の間で、漬物をつける家が減つて来ている様であるけれども、沢庵を始め多くの秋の漬物には独得の風味と、不足勝の冬の間の栄養の補給の意味で、毎日の食卓から欠かせられないものをもつてゐる。

沢庵用の大根として、宮重系と練馬系とがあるけれども、生育日数、栽培の面から宮重が多く用いられている。先ず収穫した大根は洗つて葉をつけたまま干す。葉をつけたまま干すのは葉がしおれて来るに従つて葉の養分が根に移動するからで、勿論入りを防ぐために心葉は摘除する。

干す場所は風当りが良く日光の直射しない場所が良い。大根は成可く低い温度で早めに乾かすのが良く、日光の直射する場所では温度があがり沢庵がまずくなる。乾燥時期は場所によつて異なるけれども、十月下旬から十一月月上旬が良く、乾燥状態は食用の時期によつて異なり、夏頃食用とするものは結べる位迄乾かす。

漬込の方法は塩と糠を良く攪拌して置い

て、一層々々大根を樽に隙間なく押えつけないがらならべ、糠を等分に振つて漬けて行く、漬け終つたなら大根葉をしいて蓋をし、樽の中の大根と同じ位の重しをのせ、おそくとも三日位で水があがる様にし、水があがると重しを半分位に減らし、凍結の心配のない程度の温度の低い場所に貯蔵する。

食用時期による塩、米糠の割合

食用時期	塩	米糠
一～三月	三・六疋(二升)	一四立
四	五四疋(三升)	一三立
五	七二疋(四升)	一一立
六	九〇疋(五升)	九立
七	一〇八疋(六升)	七立

備考 一 七二立樽で大根約六七疋位入る。
二 砂糖その他調味料を適量に入れる。砂糖は一樽七五〇瓦から一疋位入れると良し。



暖地

1 水田裏作の移植レ

早播きしておいた苗を定植する季節です。早期に定植するほど生育が良く、密植多肥栽培により増収できます。一〇坪当り五、〇〇〇(六、〇〇〇本。品種は晩生・大型種またはC・O(シール)が好適です。

レーブは肥料分の効果を非常に顕著に示す作物で、同一品種でも土壌が肥えていれば、茎葉が雄大になり、反対に瘠せていれば、いかにも貧弱な形態となり、青刈収量に著しい差を生じます。特に有機質肥料の有無が収量も大きく左右しますから、堆厩肥の施用を實行しましょう。

2 牧草の施肥、根瘤菌の接種

秋に播いた牧草の生育状況を観察し、イネ科マメ科がそれぞれ良好な繁茂をしているかどうかを調べ、生育状態に応じて窒素肥料、燐酸肥料を施します(イネ科の繁茂がおくれているようだったら窒素肥料を多めに施し、マメ科の生育がおさえられているようだったら燐酸肥料を多めに施用すべきです)。いま肥料を与えておくことは、牧草の根が養分を蓄積し、翌春の旺盛な伸長を約束することになります。

また、マメ科牧草で根瘤菌をつけなかつたものでは、次の要領で実施します。

- a 赤クロパー、アルサイククロパーには白クロパー自生地土を撒布する
- b ルーサン、スイートクロパーには試験管入りの培養菌を水でうすめ撒布する

マメ科牧草をはじめて栽培する畑では、根瘤菌の有無により、生草収量が大きく影響されます。とくにルーサン、スイートクロパーの根瘤菌は自然土壌にないので、接種を怠ると、幼植物にして黄化し、生育停止して、後には枯死に至り失敗の原因となりますから注意しなければなりません。

3 カブ中播燕麦の播種

九月播種のカブの畦間に、青刈燕麦の芽出播きができます。間作期間は二週間前後が適当で、早目にカブを収穫すれば、それだけ燕麦の生育にとつて有利となりますが反面、カブは燕麦の幼苗を寒害から防止してくれるので、その効果をあわせ考慮すべきです。もちろん、カブ収穫後ただちに追肥を行ない、軟弱な燕麦の生育を助け、堆肥などで寒害防止をはかることは、一般裁

培と同様です。

寒冷地

1 レーブ、ライムギのセレサン撒布

秋まきのレーブ、ライムギに根雪前にセレサンを撒布し、病害から守らなければなりません。セレサンはレーブの菌核病、露菌病、黒斑病、ライムギの雪腐病を防除します。撒布量は一〇坪当り四疋。撒布後融雪や降雨で流亡した場合は再度撒布すべきです。

実はライムギの雪腐病には二種類あります。①雪腐菌核病 ②紅色雪腐病 前者はセレサン撒布で防除できますが、後者は種子消毒でないと効目がありません。すなわち、水銀剤(ルベロン、ウスブルン、セレサン、リオゲンなど)の稀薄液に種子を三〇分間浸漬し、消毒完了後薬液よりあげて陰乾します。今春、麦類が桃色のカビを生じて枯死していたのは、この紅色雪腐病のためでした。

2 ビートトップの給与

甜菜または家畜ビートのトップは栄養価が比較的高く、蛋白質含量はイネ科牧草と同じくらいあり、泌乳効果もすぐれています。しかしビートトップには尿酸が含まれており、多量給与を続けると下痢をしたり、尿酸中毒症をおこして心臓や腎臓の機能低下を招いたりします。それは尿酸がカルシウムと化合して尿酸カルシウムとなる性質があり、骨の中から多量のカルシウムを引き出すためだとわわれています。従つて、カルシウムを供給してやる必要があります。一疋のビートトップに対して、炭酸石灰の粉末を一瓦くらい舐食させれば安全です。

3 冬期飼料の給与計画

長い冬期をむかえて、収穫貯蔵した飼料の給与計画を立てなければなりません。五月末日まで、途中で飼料が足りなくなつたり、または大量に余してしまつたりすることのないように計画しなければなりません。

それには、エンシレーシ、乾草、根菜の貯蔵量をできるだけ正確に推定し、またエンシレーシと根菜は貯蔵中の腐敗損失分をいままでの経験上から勘案して、一頭一日当りの給与量を計算します。

この際にもう一つ大切なことは、飼料内容のバランスがとれておるべきことで、飼料が極端に偏つているのは乳牛の嗜好を低下し、生理的に悪い結果をもたらします。たとえばエンシレーシが余るくらいあるからといって、エンシレーシのみを沢山給与していると、ケトosisの病因となることがあるなどはその例です。

乾草	根菜
エンシレーシ	二〇〜三〇疋
牧草	五〜八疋
根菜	二〇〜三〇疋

右の範囲内が適量で、このような給与例であればビタミン、無機質などの欠乏を来すこともありません。もちろん、エンシレーシ、乾草の材料の質が良く、仕上りも上質であれば一層望ましいわけです。そしてそれらが上質で蛋白成分にすぐれておれば、これだけの給与量で、牛乳一〇〜一五立を泌乳する栄養価を含有しております。(かねこ)